

令和元年6月13日現在

機関番号：37503

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04243

研究課題名(和文) 途上国の社会的企業における宗教性と組織文化：質的調査に基づく国際比較研究

研究課題名(英文) Spirituality and organizational culture in social enterprises in developing countries: International comparative studies through qualitative research

研究代表者

木村 力央 (Kimura, Rikio)

立命館アジア太平洋大学・アジア太平洋学部・教授

研究者番号：50517034

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：通常の社会的企業におけるハイブリッド性の変数であるビジネス収益性と社会的使命に加えて、宗教性が追加された宗教に基づく社会的企業のより複雑で未解明のハイブリッド性を、批判的实在論に依拠した制度ロジック論を援用して分析した。具体的には、カンボジアとエチオピアのキリスト教に基づく社会的企業を分析及び比較した。両国は、最近の歴史において内戦と社会主義政権を経験し、急激に経済成長している途上国という点で共通している。本研究は、その生い立ちと置かれているコンテキストに影響を受けた社会的起業家の行為主体性が、どのように制度ロジックを選択・動員し、どのようなハイブリッド性を形成したかを、探求した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的には、批判的实在論に基づく制度ロジック論の応用は、営利組織研究においては近年出始めたが、社会的企業研究においてはまだなされておらず、したがって本研究は先駆的と言える。さらに、通常の社会的企業の収益性及び社会的使命からなるハイブリッド性に宗教性が加わり、より複雑で多元的なロジック間の関係性の理論的構築を初めて試みた。社会的には、宗教に基盤を置く社会的企業のジレンマの解明を目指す本研究は、そのような企業の実践に示唆を提供する。

研究成果の概要(英文)：Using the critical realist institutional logics, this study analysed the complex and under-researched hybrid forms of faith-based social enterprises with the added dimension of spirituality - in addition to business viability and social missions as the hybridity variables of normal social enterprises. Specifically, we analysed and compared Christian social enterprises in Cambodia and Ethiopia. Both countries share the commonalities of having experienced conflicts and socialist regimes in their recent histories and being rapidly growing economies among developing countries. This study elucidated how Christian social entrepreneurs' agency, influenced by their biographies and contexts, has been exercised to mobilise institutional logics, and as a result, what types of hybrid forms have been shaped.

研究分野：社会学

キーワード：社会的企業 キリスト教 カンボジア エチオピア ハイブリッド組織 制度ロジック 批判的实在論 宗教性 キ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

研究代表者らはかつてカンボジアとエチオピアで NGO 現地駐在員として、貧困層の救済といった社会的使命の追及と同時に、活動費獲得のために資金提供者への説明責任を優先せざるを得ないジレンマを経験した。この経験を土台に研究代表者らは NGO の社会性と収益性のハイブリッド性の学術的研究を開始した。その後、寄付に頼らず収益事業で活動資金を確保する社会的企業が台頭する中、それらが社会性を軽視する課題が研究によって見えてきたため、社会的企業の社会性と収益性を巡る組織内の緊張関係を研究した(科研費基盤研究(C)2013-2015年度)。その結果、社会的企業の設立動機や経営理念に宗教的背景がある企業が多く、その運営に宗教性が加わることで、組織が更に複雑化するという現象に気付いた。そこで、カンボジアとエチオピアのキリスト教を基盤に持つ社会的企業を対象に、その社会性、収益性、宗教性の間の緊張関係を類型化する本研究を開始した。

2. 研究の目的

本研究は、キリスト教に基盤を持つ社会的企業の宗教的側面が、社会的貢献及びビジネス収益性とどのような緊張関係にあり、またその組織文化にどのような影響を及ぼすかを、紛争後の国であるが経済発展が著しいカンボジアとエチオピアの比較分析を通して明らかにすることを目的とした。特に、1)宗教的使命、社会的貢献、ビジネス収益性の間の緊張関係の類型の構築、2) ビジネス倫理及び実践に対する宗教的価値の影響の解明を目指した。本研究は「宗教と社会的企業」という新しい研究分野の開拓に貢献し、特に経済成長著しい途上国における、他の宗教を基盤とした社会的企業研究のプロトタイプとなりうる。

3. 研究の方法

(1) 文献レビュー

ハイブリッド組織である社会的企業のビジネス収益性と社会的使命の両方におけるジレンマに焦点を当てた研究で、制度ロジック論(institutional logics)を援用したものを中心に読み込んだ。また本研究が対象とするキリスト教に基づく社会的企業は、この二つの使命に加えて宗教的使命を含むため、宗教性に関する文献もレビューした。その成果物として研究分担者の森田は、Book review: Compassion and the Mission of God: Revealing the Invisible Kingdom, *Transformation: An International Journal of Holistic Mission Studies* (Sage), 36 (1), 36-37、及び 'Religious Influences on Social Enterprise in Asia: Observations in Cambodia, Malaysia and South Korea' in *Social Enterprise in Asia: Theory, Models and Practice* (Routledge)を出版した。さらに、認識論的に批判的实在論に依拠した制度ロジック論という最新の研究に関してもレビューし、本研究の理論フレームワーク及び調査手法に反映させた。

(2) データ収集

主に、カンボジア及びエチオピアにおける福音派プロテスタントの背景を持つクリスチャンの社会的起業家に、収益性・社会的使命・宗教的使命に関して深層インタビュー(in-depth interview)を実施した。批判的实在論に基づいた Archer (2003)の個人誌的アプローチ(biographical approach)を、インタビュー手法の大まかな枠組みとして採用した。すなわち、インタビューにおいて、起業家の置かれているコンテキストとそれに対する彼らの行為主体性だけではなく、そのような主体性に影響を与えている彼らの生い立ちの把握も試みた。なお起業家へのインタビューは一回のみではなく、データ分析において不足が判明した情報及び明らかになった疑問点を、後日行ったフォローアップ・インタビューで補った。また対象社会的企業のいくつかにおいては、その幹部に対してもインタビューを行った。さらに、対象社会的企業のウェブサイトやフェイスブック、及びそれら企業に関する出版物を読み込んだ。具体的には、カンボジアにおいては16団体27名、エチオピアにおいては32団体41名にインタビューを行った。

(3) データ分析

対象社会的企業の収益性・社会的使命・宗教的使命の間の緊張関係の類型の構築を目指してデータ分析を行った。特に、対象企業のコンテキストと起業家の生い立ちの特徴を把握することにより、コンテキストと生い立ちの影響を受けた起業家の行為主体性が、収益性・社会的使命・宗教的使命の間の重点の置き方の差異にどのように反映されているかを明らかにしようとした。

そのために、主題分析(thematic analysis)によってデータを帰納的に分析した。すなわち、コーディングを施し、それをカテゴリー化し、さらにカテゴリー間の動きを確認した(佐藤, 2008)。分析の効率化のため、質的データ分析ソフトウェアのNivioを使用した。

4. 研究成果

(1) 制度ロジック論

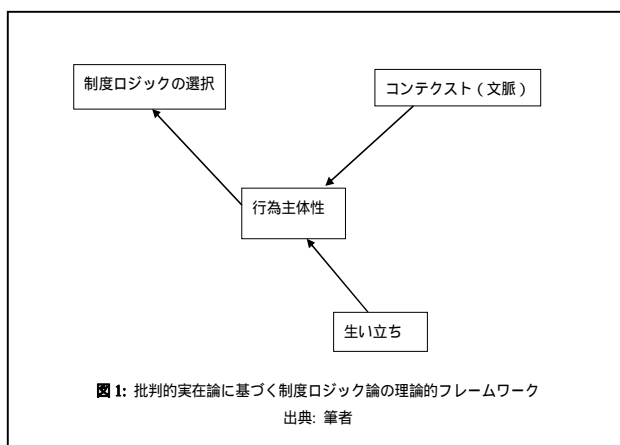
ビジネス収益性と社会的使命の追求におけるジレンマに焦点を当てた社会的企業研究の学術雑誌等を読み込む中で、収益性と社会的使命という二つの競合する組織使命や戦略が併存する八

イブリッド構造の社会的企業においては、制度ロジック論(Institutional Logics)を援用し分析するのが最新の潮流であることが判明した。制度ロジックとは、人の行動や認知に影響を与え得る社会的前提や価値観を意味する。本研究が対象とする発展途上国における社会的企業は、上記の二つの使命に加えて宗教的使命をも含み、その制度的多元性(Institutional pluralism)は複雑化する。そこで本研究は、多元的ロジックが競合・共存する環境下での社会的企業の実践を理論的に分析するために、制度ロジックを更に深化させた形の理論的フレームワークを形成した。

(2)批判的実在論

制度ロジック論に関して影響力の大きい研究をしている Thornton, Ocasio and Lounsbury (2008)は、制度ロジック論における「埋め込まれた行為主体性(embedded agency)」、つまり「制度ロジックに文化的に埋め込まれた社会行為」は、起業家の行為主体性の過大評価の誤解を解消すると述べている。しかし Leca and Naccache (2006), Mutch (2007), Delbridge and Edwards (2013), 及び Edwards and Meliou (2015)は、それでも起業家の行為主体性はまだ行為主体的に捉えられる傾向があるため、批判的実在論の認識論に基づいたフレーミングを援用すること、すなわち行為主体性を社会構造にある程度制約された現象と捉えることを提案した。しかし一方、そのような構造を変革していく行為主体性の可能性も批判的実在論は認識している。つまりこれらの研究者が提案しているのは、起業家の行為主体性を中層的に位置付けることである

この批判的実在論のフレーミングの一つとしてこれらの研究者は、制度ロジック論の二つの変数、すなわち行為主体性と制度ロジックに加えて、コンテキストあるいは構造を三つ目の変数として追加し、制度ロジック、起業家の行為主体性、そして社会構造の関係性を分析することを提案している(Leca and Naccache, 2006; Mutch, 2007; Delbridge and Edwards, 2013; Edwards and Meliou, 2015)。特に、Mutch (2007), Delbridge and Edwards (2013), 及び Edwards and Meliou (2015)は、Archer (2003; 2007)の構造との関係における行為主体性の概念を参照している。さらに起業家の行為主体性は、その生い立ちに影響されており (Archer 2003; 2007)、それは宗教的背景・経験も含む(Archer 2007; Mutch, 2007; Delbridge and Edwards, 2013)(この理論的フレームワークの概念図は、図 1 を参照)。したがって研究手法において述べたように、批判的実在論に基づいた Archer (2003)の個人誌的アプローチ(biographical approach)を、インタビュー手法の大まかな枠組みとして採用した。



この理論的フレームワークとデータの間を行き来する中で、明らかにされた点は以下の通りである。1) ハイブリッド組織研究の理論的枠組みとして援用されてきた制度ロジック論は、起業家の置かれたコンテキストが認識論の中で位置付けられておらず、個人や集団の間にある目に見えない関係性及び構造を読み取るのには不十分であること。2) 社会的企業を取り巻く流動的な制度や複雑な文化的背景を持つカンボジアやエチオピアのような途上国においては、宗教性、社会性、収益性という三つのロジック間における個々人の意思決定行為の背後にある意図やジレンマを丁寧に読み取ることが求められる。3) 個々人の生い立ちが社会構造と行為主体との関係性に影響を与えるとする Archer (2003)の概念的枠組みを援用し、信仰を基盤とした起業家達の生まれ育ちや、起業に至るまでの宗教的体験が、彼らの社会的企業活動の中で宗教性に重点を置くかどうかの意思決定要素に影響する。

(3)類型化

さて対象社会的企業が、収益性・社会的使命・宗教的使命の間のどのロジックに重点を置いているかの類型化であるが、Besharov and Smith (2014)の「ロジックの適合性 (compatibility)」と「ロジックの中心性 (centrality)」を大まかなフレームワークとして援用した。ロジックの適合性とは、あるロジックが他のロジックの補完的な役割を果たす、或いは競合することを指す。例えばカンボジアの事例のいくつかは社会改善につながるビジネスを展開し、提供するサービスや製品を通して貧困層や子供らの栄養状態を改善することなどにより、ビジネス自体が社会的使命を補完していた。一方でロジックの非適合性は、例えばビジネス・ロジックと社会的使命のロジックが競合している状態を指し、競争が激しい市場において再訓練等を必要とする社会的弱者や貧困層を雇用することは社会的企業にとって不利であることが、カンボジアとエチオピアの多くの事例に見られた。すなわちこれらの事例では、社会的使命と収益性は競合関係にある。

一方ロジックの中心性は、起業家は複数のロジックを同等に扱っているか、或いはあるロジックを偏重しているかを示す (Besharov and Smith, 2014)。この中心性の概念は、起業において個々の起業家のアイデンティティが、どのようにロジックの選択に影響するかを解明した Wry and York (2017)によるアイデンティティ基盤型アプローチ(identity-based approach)と親和性がある。第一に起業家のアイデンティティが、彼らがアイデンティティ通りに行動するように、「内なるアカウントビリティ圧力」として機能する。この考え方は、行為主体性は生い立ちに影響を受けるという Archer (2003)の理論と呼応している。カンボジア及びエチオピアの事例においても、これまでの宗教的体験のために宗教的使命に重点を置く起業家や、以前のビジネス経験のゆえに収益性を重視する起業家がいた。第二に Wry and York (2017)は、「外からのアカウントビリティ圧力」により、起業家のアイデンティティが社会的関係性の中で発揮されると述べている。例えばカンボジアの事例で散見されたのは、起業家のアイデンティティが彼らのコンテクストの一部である理事会や社会的投資家などに対して、顕著に行動化したことであった。

これらの類型化のフレームワークを援用し、カンボジア及びエチオピアの対象社会的企業を類型化した。

(4)成果の国内外における位置づけとインパクト

- (a)批判的実在論に基づく制度ロジック論の応用は営利組織研究においては近年出始めたが (Leca and Naccache, 2006; Mutch, 2007; Delbridge and Edwards, 2013; Edwards and Meliou, 2015)、社会的企業研究においてはまだなされておらず、したがって本研究は先駆的と言える。
- (b)通常の社会的企業の収益性及び社会的使命からなるハイブリッド性に宗教性が加わり、より複雑で多元的なロジック間の関係性の理論的構築を初めて試みた。
- (c)宗教に基盤を置く社会的企業のジレンマの解明を目指す本研究は、そのような企業の実践に示唆を提供する。

(5)今後の展望

- (a)批判的実在論に基づいた制度ロジック論による社会的企業研究の、理論面に関する論文の執筆。
- (b)カンボジア及びエチオピアのキリスト教に基盤を置く社会的企業の類型化の論文の執筆。
- (c)キリスト教に基盤を置く社会的企業のハイブリッド性解明の深化を目指す。具体的には、本研究のフェーズ 2 とも言える科研費基盤 C「途上国における宗教を基盤とする社会的企業：ハイブリッド組織の理論構築を目指して」(2019-2021 年度)の中で、本研究の対象社会手企業から数事例選び、それぞれの企業のステークホルダーへのインタビューと参与観察等を用いてより詳細な分析を目指す。それを基に、起業家個人(ミクロ)、組織(メゾ)、社会構造(マクロ)を含めた重層的な分析を加えることで、ハイブリッド性研究に貢献しうる深化した理論枠組みの構築を目指す。

〔引用文献〕

- 佐藤郁哉 (2008 年)『質的データ分析法 - 原理・方法・実践』新曜社。
- Archer, Margaret Scotford. 2003. *Structure, Agency, and the Internal Conversation*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Archer, Margaret Scotford. 2007. *Making Our Way through the World: Human Reflexivity and social mobility*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Besharov, Marya L., and Wendy K. Smith. 2014. "Multiple Institutional Logics in Organizations: Explaining Their Varied Nature and Implications." *Academy of Management Review* 39 (3):364-81.
- Delbridge, Rick, and Tim Edwards. 2013. "Inhabiting Institutions: Critical Realist Refinements to Understanding Institutional Complexity and Change." *Organization Studies* 34 (7):927-47.
- Edwards, Tim, and Elina Meliou. 2015. "Explaining Leadership in Family Firms: Reflexivity, Social Conditioning and Institutional Complexity." *Human Relations* 68 (8):1271-89.
- Leca, Bernard, and Philippe Naccache. 2006. "A Critical Realist Approach To Institutional Entrepreneurship." *Organization* 13 (5):627-51.
- Mutch, Alistair. 2007. "Reflexivity and the Institutional Entrepreneur: A Historical Exploration." *Organization Studies* 28 (7):1123-40.
- Thornton, Patricia H., and William Ocasio. 2008. "Institutional Logics." In *The SAGE Handbook of Organizational Institutionalism*, edited by Royston Greenwood, Christine Oliver, Roy Suddaby and Kerstin Sahlin-Andersson, 99-129. Thousand Oaks, CA: SAGE.
- Wry, Tyler, and Jeffrey G. York. 2017. "An Identity-Based Approach to Social Enterprise." *Academy of Management Review* 42 (3):437-60.

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計7件)

木村力央 (2019年) Transformative Learning through an NGO's Rights-based Approach in Cambodia: A Multi-scalar Analysis, *Compare: A Journal of Comparative and International Education* (Routledge), pp. 1-20, DOI 10.1080/03057925.2019.1574557 [査読有]

森田哲也 (2019年) Book review: Compassion and the Mission of God: Revealing the Invisible Kingdom, *Transformation: An International Journal of Holistic Mission Studies* (Sage)36(1), pp. 36-37, DOI 10.1177/0265378819831851 [査読有]

森田哲也 (2017年) Toward a Conceptual Framework for Religious Logics on Institutional Complexity: A Lesson from 'Mission Drift' in Evangelical Christian Social Entrepreneurs in Ethiopia, EMES International Research Conference on Social Enterprise, 第6回大会 Selected Conference Papers Series, ルーヴァン・カトリック大学, ベルギー, <https://emes.net/content/uploads/Tetsuya-Morita-ECSP-6EMES-03.pdf> [査読有]

森田哲也 (2017年) Wealth Creation: Biblical Views and Perspectives (Global Consultation on Wealth Creation for Transformation), The Lausanne Movement and the BAM (Business as Mission) Global Think Tank [査読有]

木村力央 (2017年) 'Social or Business' or 'Social and Business': Problematique of the Hybrid Structure of Community-based Ecotourism in Cambodia, *Evergreen - Joint Journal of Novel Carbon Resource Sciences & Green Asia Strategy* 4(2/3), pp. 38-49, DOI 10.5109/1929664 [査読有].

木村力央 (2017年) Analysis of Visioning Approaches of Oita's 'Best Practice' Rural Revitalization Cases and Its Implications to the Transfer of Oita Model to Developing Countries, *Journal of OVOP International Policy* 2, pp. 4-21 [査読有].

森田哲也(2016年)[書評]P. Greer and Horst, C., *Mission Drift: The Unspoken Crisis Facing Leaders, Charities, and Churches*, 『キリスト教と世界』26号 160-166頁 [査読付]

〔学会発表〕(計7件)

木村力央(2018年) Potential of Critical Realist Institutional Logics for Analyzing Organizational Tensions Experienced by Christian Social Enterprises: Cambodian Cases, ICSEA (International Conference on Social Enterprise Asia) 5th Conference, 立命館大学 (国際学会)

木村力央(2018年) What is the Legitimate Hybridity for Christian Social Enterprises in Cambodia?: Typologizing Efforts, 13th International Conference of ISTR (International Society for Third Sector Research), Vrije Universiteit Amsterdam (国際学会)

森田哲也(2018年) Toward a Typology of Tensions in Seeking Legitimacy as Faith-Based Social Enterprises: The Case of Evangelical Christians in Ethiopia, 13th International Conference of ISTR (International Society for Third Sector Research), Vrije Universiteit Amsterdam (国際学会)

木村力央(2017年)Critical Realist Institutional Logics Perspective for Typologizing Organizational Tensions Experienced by Christian Social Enterprises in Cambodia, ARNOVA's (Association for Research on Nonprofit Organizations and Voluntary Action) 46th Annual Conference (国際学会)

森田哲也(2017年) Toward a Conceptual Framework for Religious Logics on Institutional Complexity: A Lesson from 'Mission Drift' in Evangelical Christian Social Entrepreneurs in Ethiopia, 6th EMES International Research Conference on Social Enterprise (国際学会)

木村力央(2016年) Towards a Typology of Organizational Tension Experienced by Christian

Social Enterprises in Cambodia, 第14回アジア太平洋カンファレンス(立命館アジア太平洋大学、大分県別府市)

森田哲也(2016年) An Investigation of Coping Strategies towards Mission Drift in Faith-based Social Enterprises in Ethiopia, 第14回アジア太平洋カンファレンス(立命館アジア太平洋大学、大分県別府市)

〔図書〕(計1件)

Isaac Lyne, Jieun Ryu and Teh Yong Yuan and 森田哲也, (2019年) 'Religious Influences on Social Enterprise in Asia: Observations in Cambodia, Malaysia and South Korea' in *Social Enterprise in Asia: Theory, Models and Practice (Routledge Studies in Social Enterprise & Social Innovation)* edited by Bidet, Eric and Defourny, Jacques, Routledge, p.294-313

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：森田哲也

ローマ字氏名：Morita Tetsuya

所属研究機関名：東京基督教大学

部局名：国際キリスト教福祉学科

職名：准教授

研究者番号(8桁): 30747390

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。